

2. 第8回外邦図研究会

日 時：2007年2月17日（土）

会 場：お茶の水女子大学

共 催：お茶の水地理学会・東北地理学会

第8回外邦図研究会「ようやく全容がみえはじめた外邦図：大学所蔵目録の整備と活用」が開催された。外邦図の保存や整理に尽力された浅井辰郎お茶の水女子大学名誉教授が、折しも同大の目録がほぼ完成した2006年初冬にご逝去され、研究会の最初に式正英お茶の水女子大学名誉教授による「大いなる師表、浅井辰郎先生を偲んで」と題する追悼講演があった。参加者は53名、講演とコメントおよび参加者の討論が熱心に行われ、予定を1時間ほどオーバーした。以下に講演要旨とそれぞれに対するコメントを掲載する。

お茶の水女子大学地理学教室と外邦図との関わり

式 正英（お茶の水女子大学名誉教授）

1. 「お茶の水女子大学所蔵外邦図目録」について

この度、数年に亘る外邦図研究の成果の一部として「お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録」（2007年1月）が刊行された。刊行に至るまでの経緯については同目録書の解説や改題において詳しく述べられている。外邦図とは戦時下の陸地測量部において調製された近隣諸国の範囲の地形図類であり、字義からは「外国の地図」に当てはめての用語と解されるが、同目録書によれば日本の地形図がかなりの数含まれている。しかもそれらには戦後に刊行された版が含まれ、戦後に編集された地図集が母体であることが判る。

これに関しては1970年、浅井辰郎教授の斡旋で資源科学研究所所蔵の「東半球縮尺図 16,000枚」¹⁾を一括して購入した際、その中に含まれていた地図すべてを、原則的に今回其の俣目録化した事に原因があると思われる。当時はお茶大の地理学教室員は上記の一群の地図を「資源研の地図」と呼んで、折々拝見させて戴く程度であった。「東半球縮尺図」として資源研での呼称は、参謀本部から移動した地図の由来を曖昧にする意味があったであろうし、まして軍での呼称であった「外邦図」とは敢えて言うまいとする様な認識はあった。

お茶の水女子大学は戦後の1949年に発足した新制大学ではあるが、明治初年の1874年に創設された東京女子高等師範学校を引継いで建学されたので、明治大正と昭和戦前の遺産を其の俣継承した、歴史的伝統の上に建つ学校である。女高師時代には地理学教室として独立はしていなかったが、地歴科地理学の専任教授は着任していたので、地図類の整備も着々とすすめられて来ていた。地形図の製本されたものは、単行本と同様図書備品として扱われており、2万分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図等戦前版が数多く所蔵されて来た。その分はどうやら今回の目録には合わせて掲載されている様に思われる。

この「外邦図目録」には「資源研から購入した地



浅井辰郎先生（2003年11月）

図」を中心に、女高師時代に収集した地図、関係者から寄贈された地図を含む16,886図幅を収録したとある²⁾。併し筆者在籍中（1959～1992年の33年間）の記憶にある外邦図の中に、目録から洩れているものが他にもある様にも思われる。それは綴じられていない一枚々々の単葉の地図であり、消耗品扱いとされて来た類いである。

在籍当時、大学では一般的に地形図は、図書同様の扱いとして購入され、図書館の捺印を受けるが、資料として保存用となる以外の、調査研究用や学習作業用の地図は消耗品として扱われ、教官や学生個人の使用に供された。つまり単葉の地図は備品に登録されて保存されるものと作業用に使用され消耗品扱いになるものとの2種類に区別された。こうした扱いは地図利用に伴う宿命でもあったし、女高師からお茶大へ継承された地図の取扱いのルールでもあった。

その内の女高師時代の作業用地形図が約1,000枚程単葉の形で、地理学教室製図室の地図棚に保管されていた。主にかつて旧領域であった朝鮮半島であり、陸地測量部製の5万分の1地形図である。作業用と判断した根拠は、土地利用別の色分け作業途中の図や学生の名前が記された図が数10図葉も含まれていたからである。これらが今回の目録に収録されたか否かは、作業過程に携わっていない為明らかとは言えなかったが、当原稿執筆中（2007年11月上旬）に手にすることが出来た「お茶の水地理 第47

号」に掲載された宮澤 仁准教授らの論考³⁾によって、この分が含まれていることが明白になった。尚今回の外邦図目録中にある日本の地形図などを除いた本来の外邦図の総計は12,909図幅とされた。更に製図室地図棚に保管されていた単葉の地図の外邦図は合計1,276枚、内朝鮮半島分は665枚の現存することが、宮澤准教授の調査によりこの度明らかにされた⁴⁾。

2. お茶の水女子大学の外邦図と浅井辰郎教授の着任

歴史の古い学校には思い掛けない所に資料が寝かされていることがある。昭和60(1985)年、当時地理学科主任の井内 昇教授から附属高校の桜井孝行教頭宛に出された文書⁵⁾によると、大陸地形図(朝鮮、満州)2.5万分の1、5万分の1、10万分の1の計338枚と海図70枚の寄贈を受けたとする内容であった。この文書は高校(又は個人)から大学への寄贈に関する確認と礼状なのであるが、備品の所管換えではなく、消耗品的扱いの物品資料の委譲と思われる。これらの地図が地理学教室の中で、その後どのように保管処理されたかは筆者の記憶には定かではないが、「資源研の地図」とは異なったルートで、外邦図が教室内にある程度の量蓄積されて来た別の事例となろう。

お茶の水女子大学は1975年以降から現在は博士課程が設置された大学院大学となっているが、1949年新制大学として発足してから暫くは学科目制3学部の小規模大学であった。1963年以降学部ごとに研究科(修士課程)を設置する機運が生じ、1966年には人文科学研究科ができて、全学が修士課程を持つ講座制大学へと移行した。地理学科においても翌昭和42(1967)年4月、浅井辰郎教授をお迎えして陣容を整えることになった。即ち人文地理学、自然地理学の2学科目制から人文地理学、自然地理学、地誌学の3講座制となった。人文地理学講座は松井 勇教授・正井泰夫助教授、自然地理学講座は浅井辰郎教授、浅海重夫助教授、地誌学講座は渡辺 光教授・式 正英助教授、貝山久子助手で構成された。

浅井辰郎教授は気候学を専門とされる既に著名な地理学者で法政大学教授であられたが、渡辺教授か

らの徳憑もあって国立大学であるお茶の水女子大学に転出された。浅井教授は京都大学地理学の御出身であり、大学卒業後、満洲の建国大学に赴任されたが、兵役に就かれ戦後2年間のシベリア抑留を体験された後帰国され、1947年12月直ちに資源科学研究所に勤務された。そこで外邦図(東半球大縮尺図)と出合い、その整理や管理を担当されることになった。法政大学に転出後も資源科学研究所研究員を兼務され、お茶の水女子大学に来られてからも、非常勤研究員を同研究所解散時の1971年3月まで兼務されていた。

昭和45(1970)年、財団法人資源科学研究所が解散される事がきまり、その所蔵する地図を処分したいとの意向が浅井教授を介してお茶大地理学教室にも伝えられて来た。丁度その時期の1970年3月、やや長期にわたり教室主任であられた渡辺 光教授が定年御退官を迎えられて、松井 勇教授が主任になられた。浅井教授は上述した関係から資源科学研究所の要請に応えるべく「東半球大縮尺図(「東半球詳細地図」とも表現される)」を、貴重資料の散逸を防ぐ為にお茶の水女子大学で購入するよう事務局に熱心に働きかけられた。

その努力の甲斐があつて、年間の大学の経常経費とは別枠の国の予算として、購入経費220万円を獲得できたことにより、この願いは解決された。文部省に折衝に当られた当事者は萬波 教氏(東大国文卒)であり、市古宙三文教育学部長(東洋史)、波多野完治学長(心理学)の時代である。国費による上記地図購入の成果は、当時折衝に当られた大学スタッフの理解と好意を得られたことが大きく働き、又戦中に開所された資源科学研究所は当初は文部省に所属していたと言う利点もあつたであろう。資源科学研究所としては解散に直面し職員の退職金の元資にあてる必要性があつたと浅井教授が説明されている⁶⁾。また同教授御自身は東半球大縮尺図を齎すことは、お茶大への「転勤土産」と意識されていた⁷⁾。

3. お茶の水女子大学での外邦図の管理

この様な経過を経て一括購入された「東半球大縮尺図」は、1971年1月お茶の水女子大学本館1階の

浅井研究室に搬入された。架台3基に吊り下げられた地図集の形であり、全部で191冊分あった。1972年3月、既に建築中であった文教育学部棟の新築完成に伴い、同年6月地理学教室は新学部棟7階に全部が移転し、上記地図は計測室(704室)に移された。又1970年度中に浅井教授の科学研究費によってM2型マイクロフィルム撮影機も購入された。この器材は建物移転後、新棟7階南西角の浅井研究室(701室)の中に設置された。この教室の移転の時期は、筆者にとっては偶々欧米での1年間の長期在外研究中にあたり、何の助力も出来ずに終わってしまい、申し訳なく思っている。

浅井辰郎教授のお茶大在籍中は、最も活発に「東半球大縮尺図」である外邦図を利用されていたと思われる。当該地図資料に関してはすべて浅井教授の管理下にあったので、他大学へのコピー供与の事例等について、他の教室員に知らされることはなかった様に思う。マイクロフィルム撮影機と外邦図のお茶大への購入を、殆んど同時に進められ首尾よく成功されたことには、かなり御満足の様子であった。御退官の折の述懐に、お茶大在勤中「欲しい器械や資料は大体叶えられた」⁸⁾と記されている。このたびの一連の外邦図研究ニューズレター等⁹⁾によって、浅井教授在勤当時の外邦図をめぐる他大学等との交流の詳細を、当時の教室員であった筆者も初めて知り得た次第である。つまり「東半球大縮尺図」に関しては、浅井教授在任中進んで御自身が管理にあたられており、教室会議等でも複製配布の一切の業務の報告はなされなかったと覚えている。

松井 勇教授は1973年3月定年退官され、浅井教授は1975年4月から1979年3月まで附属高校校長に併任せられて後、1980年3月に定年退官を迎えられた。1980年4月以降は「東半球大縮尺図」の管理、複写などは他の教室関連事項と同様、教室主任の主宰する教室会議事項として処理されることになり、図書・地図の整理や貸出し収納等の実務は定期的に助手が勤めてきた。

1981年6月、筆者が教室主任を担当している折、出版社の株式会社「学生社」より教室に接触があり、鶴岡正巳社長より教室所蔵地図の借用願が提出された。浅井教授退官後も東京都立大学東洋史研究室よ

り外邦図閲覧の希望があり、そうした要請や依頼にはなるべく応じていたが、その内コピーだけを目的とする貸出し要請があつて対応に苦慮した経過があつたかと記憶する。即ち備品としての貴重資料はそれなりに慎重に扱われて然るべきとの観点に立つ必要があつた。消耗品なら滅失しても致し方ないで済むが、備品となればそうした扱いでは済まない筈である。「東半球大縮尺図」は購入の経緯から貴重資料の備品であつた。

文献「琉球諸島地形図集成解題」(柏書房)に記載された浅井教授の所論によれば「第47、48冊は台湾、第49～55冊は朝鮮の各5万分1地形図で、これは1981(昭和56)年に学生社が復刻、出版した」とある¹⁰⁾。この記述は浅井教授が御退官後のことを想像で書かれたもので実情とは異なっている。上記の様に鶴岡社長よりの要請があり、これに対応する為に、主に消耗品扱いの女高師以来蓄積されて来た朝鮮の地形図を暫時貸与することにしたのである。

そもそも鶴岡氏は飯本信之名誉教授¹¹⁾の御子息と同窓で同教授とも親しく、同氏よりの依頼は本学が外邦図を保持しているとの情報を得た上であつた。

「この度小社では朝鮮半島5万分の1地図集成の刊行企画にあたり、小社は原地図を各方面で蒐集し、全地域715図のうち425図を手に入れました。つきましては不足の290図について、貴地理学教室所蔵の同図を借用致したくお願い申し上げます」と必要な図幅を明示した索引図付きの文書で申し出られた。つまり学生社が独自に蒐集努力して来たが、不足分をお茶大の所蔵地図で補いたいが、借用させて貰えるであろうかとの問い合わせと依頼であつた。それに対し、教室側としては消耗品扱いの女高師伝来の該当の地形図を貸与し、それでも不足する10数枚を「東半球大縮尺図」からの貸与に応じたと覚えている。貴重備品である「東半球大縮尺図」を、できるだけ保護するために採った処置である。決して安易に朝鮮、台湾の地図集全体の貸出しに応じた事実は無いのである。御退官後も巨細を御報告できていたとすれば、より正確な御理解を戴けたのではないかと思うと、いささか残念な思いが残る。

小規模の教室に貴重資料が保管される場合、その円滑な利用に関しては問題が起りやすい。利用者が

純粋な学術的研究目的で訪れる場合には、いつもなるべく円滑に対応できて来たと思うし、利用者にも満足して頂けたと思う。大規模な貸出しや複写要請に応ずるのは殆んど困難と考えられる。利用意図も選別せざるを得ないことも起り得る。出版を意図した複製目的を含めて、たとえ研究用としても取り敢えずの大量の複製依頼には、資料の所在移転による資料価値低減の問題も起り得るから、諸種の事情が充分考慮され対応されてよい筈である。

所在情報の目録化は貴重資料利用への道を開く第一歩である。研究教育が大学の目的である以上、一般へのサービスは余力があれば応じられる範囲となるのは止むを得ない事柄であろう。関係者により地図資料のデータベース化等より利用し易い環境を構築する方向で模索推移することが望まれる。

注

- 1) 浅井辰郎(1972)：東半球大縮尺図のことも お茶の水地理 13号 pp. 48-49。
浅井辰郎(1971)：プラスマイナスの当り年 お茶の水地理 12号 pp. 53-54。
- 2) 大浦瑞代、高槻幸枝、宮澤 仁(2007)：お茶の水女子大学所蔵の外邦図について 『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』 pp. 3-4, お茶の水女子大学文教育学部地理学教室。
- 3) 宮澤 仁・高槻幸枝・大浦瑞代・田宮兵衛・水野 勲(2007)：お茶の水女子大学所蔵外邦図コレクションの全体像 お茶の水地理 47号 pp. 1-14。
- 4) 宮澤 仁准教授より筆者当てに送られた通信(2007年11月13日)による。同准教授の調査によると「韓国及び北朝鮮 665枚(内5万分1 599枚)、満洲・関東州 70枚、海図298枚、航空気象図87枚、等(以

下略)計1,276枚」の数字である。

- 5) 昭和60年3月31日、地理学科主任 井内 昇より桜井孝行宛てに発行された文書。「いずれも現在では手に入れにくい貴重なもので、教室としては保管に留意し、教育や研究に利用させて頂きたい」と記されている。「大陸地形図、朝鮮5万分の1 176枚、満洲 10万分の1 101枚、5万分の1 24枚、2万5千分の1 37枚、海図 日本総部及び付近諸海 70枚、合計408枚」の内容である。
- 6) 浅井辰郎(1999)：琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか 『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』 解題 pp. 23-26, 柏書房。
- 7) 上記浅井辰郎(1999)の所論中にもある。又『お茶の水女子大学所蔵 外邦図目録(2007)』に掲載の「浅井辰郎(2000)：資源科学研究所の地図の行方—多田文男先生の英断」の中にも記載がある。
- 8) 浅井辰郎(1980)：お茶大十三年、その感謝と希望 お茶の水地理 21号 pp. 3-4。
- 9) 久武哲也(2003)：旧資源科学研究所所蔵の外邦図と日本の大学・研究施設等所蔵の外邦図との系譜関係 外邦図研究ニューズレター No.1 pp. 15-20。
小林 茂(2005)：「外邦図」へのアプローチ 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 4~6。
久武哲也(2005)：日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係 地図情報 Vol.25 No.3 pp. 7-11。
- 10) 注6)の文献のp.25にこの記載がある。
- 11) 飯本信之名誉教授(1895~1989)は東京女高師教授からお茶の水女子大学教授、初代文教育学部長を勤められ、地理学科の創設に当られた方である。

浅井辰郎先生（1914-2006）と外邦図

久武哲也（故人、甲南大）・小林 茂（大阪大）

お茶の水女子大学所蔵の外邦図目録を考えるに際して、その収蔵・保存に努力された浅井辰郎先生の役割はきわめて大きく、先生のご努力のおかげで、私たちは現在のようなかたちで外邦図と接することができるといってもよい。大学所蔵の外邦図の来歴をみると、多数の方々がこの保存や整理に関与されていることがわかる（金窪，2004；三井，2004；中野，2004）。浅井先生は、このなかで資源科学研究所旧蔵の外邦図を系統的に分類整理し、重複分をいくつものセットとするだけでなく、それを全国の主要大学に配分された（浅井，1999；2007；久武，2005）。多くの大学に現存する外邦図コレクションの骨格をつくられたわけである。以下では、浅井先生が情熱をかたむけてこのような外邦図の分類整理にあられた背景を簡単に検討し、先生のお仕事の意義を考えてみたい。

浅井辰郎先生と外邦図との関係を考えるに際して、先生と多田文男氏（1910-1978）との関係をまず考慮する必要がある。多田氏は、第二次世界大戦末期に大本営参謀であった渡辺正氏が組織した「兵要地理調査研究会」の中心メンバーであり（久武，2005）、その関係から、終戦直後の参謀本部からの学術研究を目的とする外邦図の持ち出しに大きく関与し、さらにその保存、整理まで重要な役割をはたした。多田氏が駒澤大学に寄贈した大量の外邦図（大槻，2005）も、上記のような経緯の中で入手したものであろう。

さて、浅井先生の父である浅井治平氏（1891-1974）は、1921～1924年東京大学地理学教室に在学し、多田氏と交友関係を持った。これが、浅井先生と多田氏との関係のはじまりをつくったと考えてよいであろう。治平氏が30歳になって東京大学に入学したのは、小学校の代用教員・準教員をへて1912年に静岡師範学校を卒業し、教員生活を続けながら、1914年に東京高等師範学校に進学し、これを卒業して（1918年）、師範学校・中学の教師に就任してのちも、さらに地理学研究を志していたからと考えられる（「浅井



写真1 浅井辰郎先生（2003年11月）

治平・やえ等の年譜」、浅井編，1981，pp. 217-228.）。東大地理学教室在学中の治平氏について、多田氏はつぎのように書いている。

浅井さんは私より九つ上なものですから、親爺のようなもんでした。……[治平氏が]葱状構造という地形を発見されまして、それを当時おえら方の雑誌である地質学雑誌に学生のうちに発表されたという状態でした、私は浅井さんからいつでも地理学を習っていたという状態でございます。それと浅井さんには特に我々学生の意見を先生に取継いでもらうことをお願いしていました。……（多田，1981）

治平氏が若い学生から兄のようにしたわれていたことがうかがえる。

浅井先生が1939年に京都大学文学部を卒業し、大

学院に進学後、1940年に満州建国大学の助手に就任してから、1942年に多田文男氏（当時東大助教授）が副団長をつとめる「山西学術調査」に陸軍嘱託として参加したことは、こうした治平氏を通じた関係が一定の意義をもったと考えられる。多田氏は1933年の「熱河調査」以来、数度にわたる中国大陸での調査に参加し（久武，2005；佐藤，2005）、「山西学術調査」では、当時陸軍士官学校教授であった渡辺光氏（1904-1984）とともに、計画の推進者であった。浅井先生は、この「山西学術調査」後半の五台山の調査では、気象班として独立した活動をおこなった（山本編，1943，pp. 252-261）。

浅井先生が1947年11月にソ連抑留から復員したあと、12月に資源科学研究所員に就任し、さらに1948年に法政大学の教員として職をえたことも、親子2代にわたる多田氏との縁とは無関係とは考えられない。資源科学研究所は、文部省に設置された資源科学諸科学連盟（1941-1942）を発展させたもので、1942年11月に開所した。地理部門には多田文男（東大助教授）・小笠原義勝（1914-1964）・坂啓道が所属した（佐藤，2005）。第二次大戦後民間にうつされて1971年まで存続し、研究成果として『資源科学研究所彙報』を刊行している（三井，2004）。第二次大戦終結後、中野尊正・三井嘉都夫氏らによって参謀本部から持ち出された外邦図は、各地を転々としたあと、この資源科学研究所（当時は新宿区百人町の陸軍技術研究所あと）に保管されることになった。そこで浅井先生は外邦図と出会うことになったわけである。当時を回想して、浅井先生はつぎのように書いている。

資源科学研究所に運び込まれた膨大な地図は、筆者が勤め始めた1948（昭和23）年には、一部は2階の廊下にある天井まで届く大戸棚に詰まっていたが、大部分は半地下室に埃をかぶっていた。半地下室には直径1メートルくらいのダクトが何本も縦横に走り、1、2階の元軍用実験室の有毒ガスを吸引していた模様で、地図はこのダクトの間にうず高く積み上げられていた。四方の壁には高さ、幅とも1メートルくらい窓が所々にあったが、ガラスは何枚か割れたままで、そこからロームの土埃が容赦なく吹き込み、

地図を厚く覆っていた（浅井，1999）。

雨露はかからないにしても、放置状態だったわけである。

こうした外邦図の整理は、「サンフランシスコ平和条約が締結されたので[1951年]、もうそろそろ動かしてもよいでしょう」という多田氏の意見からはじまったという。初期は整理費用もなく、なかなか作業が進まなかったが、立教大学による外邦図の買い上げにより資金ができ、整理が進行することとなった。浅井先生は学生アルバイトを指揮して一枚一枚の図を国別、縮尺別、図番号順にあつめ、図がもつともそろったAセットからTセットまで計20組をつくることになった（浅井，1999）。1967年に浅井先生はお茶の水女子大学に転勤し、上記のように整理された外邦図のもつとも充実したAセットをその所蔵とした。すでに久武（2005）が示しているように、浅井先生の整理・分類された外邦図のセットは、東京大学地理学教室、京都大学地理学教室、同東南アジア研究センター、立教大学、広島大学、筑波大学などに配分されているが、その量（約1万7千種類）からしてもお茶大の所蔵資料の重要性は明らかである。

つぎに外邦図の利用をみてみよう。浅井先生が関東の出身でありながら京都大学地理学教室に学び、また今西錦司などフィールド科学で活躍した研究者に接したことは、外邦図の利用を西日本の研究者にも拡大した。浅井先生は、内モン草原調査隊（木原均隊長、1938年8～10月）に参加するほか、建国大学着任後もミクロネシアのポナペ島調査（今西錦司隊長、1941年7～9月）に参加している。この隊員の一人であった梅棹忠夫氏は、ポナペ島への航海中のこととして、つぎのように書いている。

……時間がくると、（隊員たちの）当番は中甲板へおりて気象観測に従事した。観測は、地理学者としてこのような遠征隊の経験をつんでいる浅井辰郎さんの指導のもとにおこなわれた。種目は、海洋気象観測の型どおりに、気温、アスマン通風寒暖計による湿度、風向、風力、雲形、雲量、うねり、水色、海水温度、気圧、ポリメーターによる湿度などのほかに、自記温度計が一基うごいていた（梅棹，1990，p. 122）。

この調査の学生隊員には、梅棹氏のほか、中尾佐助氏、川喜田二郎氏、吉良竜夫氏などがいた。こうした人々とのネットワークを通じて、外邦図の利用がひろがることとなった（浅井，2007）。

この時期の浅井先生に関連してもうひとつ重要なのは、先生が小牧実繁京大教授の組織した通称「吉田の会」（総合地理研究会）の初期の活動に参加したことである。小牧教授らは当時、陸軍の高級将校、高嶋辰彦を通じて財界からの資金をうけ、地政学方面の研究と報告書の作成をすすめていた（久武ほか，2007）。このメンバーには、やはり京大地理学教室の卒業生である米倉二郎氏や別枝篤彦氏のような、のちに外邦図の利用者になる研究者がいた。

ところで、この時期の京都のフィールド科学研究者のあいだでは、今西グループと小牧グループが対立していたとする見方が表明されている（山野，1999；水内，2001）。とくに梅棹氏の小牧氏に対する批判（「探検と地政学」、1943年）をヒントに展開されたこの見方について、浅井先生にお尋ねしたところ、そのような対立は感じられなかったことを強調された。筆者は、やはり京大地理学教室の卒業生である川喜田二郎氏からも、こうした対立はなかったことを聞いており、この見方が強調する対立の構図は、浅井先生が述べられているように（小林茂・久武哲也・山野正彦・水内俊雄あて書簡、2002年4月5日）、後世の見方を過去に投影したものと考えられる。

浅井先生の外邦図に関する遺稿（浅井，2007）には、上記の研究者をふくめ、多彩な外邦図の利用者が示されている。浅井先生はこうした人々への閲覧・複写サービスを通じて、第二次大戦後に再開された、アジア太平洋地域における日本の学術調査や地域研究に貢献されることとなった。アジア太平洋地域には、現在もなお地形図など大縮尺図の入手が困難な地域もあり、手数のかかる外邦図の分類・整理作業の成果をふまえたこのサービスの意義は大きかったと考えられる。

また、お茶大の外邦図は、『朝鮮半島五万分の一地図集成』（1981年、学生社）や『台湾五万分の一地図集成』（1982年、学生社）、『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』（1999年、柏書房）といったリプリントのものになるだけでなく、『中国本土地図目録』（布目・

松田，1987）の作製にも利用された。後者に際し、マイクロ撮影された外邦図のプリントは、大阪大学東洋史学教室が利用しており、筆者（小林）もお世話になった。いずれも浅井先生がお茶大を退職したあとのものとなるが、先生が指揮された分類・整理作業がなければ、実現しなかったであろう。

ところで、筆者（小林）が外邦図研究の必要性を痛感したのは、お茶大コレクションに含まれている地図を中心に企画された上記『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』刊行の際に、浅井先生よりその由来をご教示いただいたことによる。先生は筆者のあまりに無知な質問に対して、的確に外邦図の性格とお茶大への収蔵の経過を教えて下さった。私たちの外邦図に関する作業は、浅井先生のお仕事の継承であることを、現在もつよく感じている。また筆者ら（久武・小林）がお宅にうかがい、戦前戦後のお話をうかがった時（2002年3月30日）には、芳江夫人とともに暖かく迎えて下さったことも忘れられない。あらためて浅井先生に感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

なお、本稿のファースト・オーサーである久武は、胃ガンとの闘病1年半ののち、2007年7月27日自宅にて逝去した。享年60歳であった。本稿のもとになった、2007年2月17日の発表用パワーポイントについては、事前に原稿を病室に持参して相談したことを付記しておきたい。また本稿は、『季刊地理学』59（1），pp. 57（2007）に掲載されたこの発表の要旨に大幅に加筆したものである。



写真2 浅井先生と芳江夫人

文献

- 浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井芳江.
- 浅井辰郎 (1999)「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和 琉球諸島地形図集成 解題』柏書房, 23-26.
- 浅井辰郎 (2007)「資源科学研究所の地図の行方：多田文男先生の英断」宮澤仁・高槻幸枝・大浦瑞代・内田忠賢編『御茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』御茶の水女子大学文教育学部地理学教室, 5-9.
- 梅棹忠夫 (1990)『梅棹忠夫著作集、第1巻、探検の時代』中央公論社.
- 大槻 涼 (2005)「駒澤大学所蔵外邦図の整理状況について」『外邦図研究ニューズレター』3, 121-124.
- 金窪敏知 (2004)「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から地理調査所への改組について」『外邦図研究ニューズレター』2, 39-45.
- 佐藤 久 (2005)「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後」『外邦図研究ニューズレター』3, 61-71.
- 多田文男 (1981)「オヤジ」浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井良江, 38-40.
- 中野尊正 (2004)「外邦図と私とのかかわり」『外邦図研究ニューズレター』2, 50-53.
- 布目潮颯・松田孝一 (1987)『中国本土地図目録』東方書店.
- 久武哲也 (2005)「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 5-19.
- 久武哲也 (2005)「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」『地図情報』25 (3), 7-11.
- 久武哲也・鳴海邦匡・石橋諭・小林茂 (2007)「総合地理研究会と皇戦会：初期地政学グループの活動」『2007年人文地理学会発表要旨』58-59.
- 水内俊雄 (2001)「通称『吉田の会』による地政学関連史料解題」『空間・社会・地理思想』6, 59-63.
- 三井嘉都夫 (2004)「私と外邦図」『外邦図研究ニューズレター』2, 46-49.
- 山野正彦 (1999)「探検と地政学：大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向」『人文研究』(大阪市立大学文学部) 59 (第9分冊), 1-32.
- 山本地榮編 (1943)『山西学術探検記』朝日新聞社.

浅井辰郎先生の地図配布のお手伝い

松田孝一（大阪国際大）

筆者が1988年まで助手として勤務した大阪大学文学部東洋史研究室では、中国の歴史地図作成のための基本地図として、参謀本部の残した中国本土地図に大きな関心が向けられ、収集活動が行われていた。それらの収集を始められたのは、1970年代のことで、布目潮瀧教授（当時：教養部）、斯波義信助教授（当時：文学部、現名誉教授）、本田治助手（現立命館大学教授）が中心となられた。まず、東大総合研究資料館所蔵資料をマイクロフィルムに撮影させていただき、その資料の目録を作成し、1976年に大阪大学アジア史研究会から刊行した（布目潮瀧・本田治 1976）。そのマイクロフィルムやプリントは現在も大阪大学大学院文学研究科の東洋史研究室に所蔵され、研究の用に供されている。筆者の記憶が正しければ、このフィルムは関西大学と仏教大学の要請で、東大総合研究資料館の御許可を受けてそれぞれ複製が作られている。

その後、筆者は、研究室助手として、布目潮瀧教授の命を受け、新目録（布目潮瀧・松田孝一 1987）作成のお手伝いをした。新目録は、前目録に既刊の国会図書館・東洋文庫所蔵資料目録（西村庚 1967）、国立国会図書館所蔵資料の目録（同図書館 1982）の所載データに、お茶の水女子大学、京都大学人文科学研究所・同文学部地理学研究室・同東南アジア研究センター所蔵資料の調査データを加えたものである。

新目録に入れた資料のデータ調査に関しては、以下のように進められた。まず、お茶の水女子大学所蔵資料については、1978年から、昭和53・54年度科研（代表者：布目潮瀧）により実施された。斯波義信教授がお茶の水女子大学に浅井辰郎先生をお訪ねして、調査とマイクロフィルム撮影の御許可をいただき、その後、本田助手、水野正明氏（当時：大学院、現駿台予備学校漢文科講師）が調査を行ない、東大総合研究資料館未収資料を中心として、全体の3分の2を撮影させていただいた。そのマイクロフィルムと焼きつけたプリントもやはり、現在も大阪

大学大学院文学研究科東洋史研究室に所蔵されている。

その後、布目潮瀧教授は、京都大学の各部局に所蔵されている関係資料の調査について、折衝され、所蔵地図の目録用データ（図名、測量、製版、発行年など）の収集作業を行った。筆者のお手伝いは、その折衝に随行することから始まった。1982年の2月に地理学研究室、3月に人文科学研究所、4月に東南アジア研究センターを訪問して、各部局の多くの先生方や大学院生の協力を得て、作業を進めた。収集したデータと従来の目録データを合わせて、整理作成された新目録は、1987年3月に『中国本土地図目録（増補版）』として東方書店より刊行した。



写真1 『中国本土地図目録』表紙
（左が1987年刊行の増補版、右が1976年刊行）

新目録刊行後の翌月87年4月15日付で浅井辰郎先生から布目先生と筆者にお手紙をいただいた。そこには、それまで浅井先生が、多田文男先生と行った外邦図配布の経緯と、同氏宅に、資料の残部がなおあり、それらを希望者へ配布したいが、御自身には、アイスランド研究のため時間がなく、多田先生のご遺志に沿うために筆者のところで中国の分だけでも預かり、全国、外国の頒布希望者に配布できないかのご要望が認めておられた。

先生のお手紙で筆者は、刊行した目録が、実は多田・浅井両先生の地図配布先の一部の所蔵リスト

だということを知ることになった。そして筆者らの目録の対象とはならなかった収蔵機関がまだ他にもあったのだということも知った。

先生のお手紙には、それまでの配布先として立教大学東南アジアセンター、広島大学地理学教室、中国研究所、京都大学地理学研究室、ドイツ Bochum 大学、京都大学東南アジア研究センター、筑波大学、京都大学人文科学研究所、大阪大学アジア史研究会（複写が主体）、筑波大学と書かれていた。

筆者は、浅井先生からのご連絡があったのも何かのご縁と考え、先生の委託をお受けすることとし、11月10日に先生宅を訪問してお話を詳しく承った。同月13日に先生から6,040枚の地図が送付された。うち「満州」の地図約1,200枚のうち半数は両端が切除されたものであった。ただちに、それらの目録を作成し、中国本土、中国東北（旧満州）の2区分各12セットに整理し、写真全紙大印画紙用の緑色の函に納めた。同じ図幅で10数枚あるものもあれば、1枚しかないものもあり、セットNo.1が枚数が多く、順次枚数は減り、No.12が最も少なくなる。

No.1, 3, 5, 7の比較的枚数の多いものは、すぐに浅井先生へお返しした。先生のお話しでは、No.1は地図関係の博物館が実現した際にそこへ収蔵されることのであった。2007年2月17日の外邦図研究会で、博物館が実現していないこと、そして緑の紙函に納められた地図は浅井先生のもとに残され、現在は筑波大学研究室で整理中の地図遺品の中にあることを承った。

残りのNo.2, 4, 6, 8, 9, 10, 11, 12は2000年までに大阪大学文学部東洋史、関西大学、仏教大学、奈良大学、大阪国際大学などの機関及び研究者へ配布した。残余を筆者の研究室に保管していたところ、思いがけず、『日本経済新聞』（2004年1月31日）の記事（「日本軍の地図大量に現存」）により小林茂教授が旧参謀本部作成の地図の現存状況を総合的に調査されていることを知り、御連絡を取らせていただき、寄贈さ

せていただくことをお願いして快諾していただいた。同年3月3日に大阪大学文学部地理学研究室にて小林教授にお渡しし、浅井先生から委託されていた6,040枚すべての配布を完了した。

配布を完了した旨、寄贈先リストを付して、すぐに浅井辰郎先生に書面で報告したところ先生から折り返しお電話をいただいた。1987年に先生宅を訪問した折りに、先生がそれまでの寄贈先などをびっしりと細かな字で書かれた分厚いノートをお開きになっていたことを記憶しているが、このたびの電話では、先生が筆者に地図を委託したことについては、すでにご記憶になっておられなかった。ただ、お話しているうちにことの経緯は御理解していただけた。

以上が筆者が関わった外邦図、特に中国本土地図の目録作成と浅井先生の地図配布事業との関わりである。中国本土地図は、近年の中国の開発の進展で姿を変えて行く中国の景観を記録するものとして極めて貴重な歴史資料でもあり、また筆者の研究している13世紀～14世紀の中国の景観すら中国本土地図の上に読み取ることができることも多く、拙論で何度か活用できた。今、それらがデータベースとして知的財産として共有されつつあることに喜びを感じるものであり、多田文男、浅井辰郎両先生がその保存と利用の道を開かれたお心を多とするものである。

文献目録

- 西村庚 1967 : 同 (編) 『中国本土地図目録 : 国立国会図書館及び東洋文庫所蔵資料』 極東書店
- 布目潮颯・本田治 1976 : 同 (編) 『中国本土地図目録 : 東京大学総合研究資料館所蔵資料』 大阪大学アジア史研究会
- 国立国会図書館 1982 : 同 (編) 『国立国会図書館所蔵 地図目録 外国地図の部(1)』
- 布目潮颯・松田孝一 1987 : 同 (編) 『中国本土地図目録 増補版』 東方書店、第2版 (1990)

お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の特徴

宮澤 仁（お茶の水女子大）・高槻幸枝（お茶の水女子大・院）

本発表では、お茶の水女子大学が所蔵する外邦図の目録（お茶の水女子大学地理学教室、2007）の編集作業からみえてきた、その全貌と特徴について報告する。なお、本目録は、既刊の『東北大学所蔵外邦図目録』（東北大学大学院理学研究科地理学教室、2003）から一部情報を転用したこともあり（両大学が共に所蔵する地図の情報など）、東北大学の目録にほぼ準拠して作成されている。ゆえに、同じく東北大学の目録を参考に作成された『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』（京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室、2005）もあわせると、3大学間で地図一点一点を対象とした所蔵状況の確認が可能となる。

現在、お茶の水女子大学の外邦図コレクションは、文教育学部地理学教室の地図室に収蔵されており、①資源科学研究所より購入した地図、②本学の前身である東京女子高等師範学校時代に収集した地図、③教室関係者から寄贈された地図や来歴不明の地図から構成される。①の地図が全体の95%を占めるが、日本本土の戦前の地形図や戦後発行の地図も含まれている。外邦図の範疇から明らかに外れる地図を除くと、所蔵数は図幅数にして約13,000点である。地形図のみならず、航空図や海図、地質図も存在し、アジア・太平洋地域を中心に東はアラスカから西はヨーロッパまでの広範囲をカバーしている。国内の大学機関におけるコレクションとしては最大規模のものである。

そこで、目録の情報に基づき、東北大学ならびに京都大学総合博物館のコレクションと比較したところ、お茶の水女子大学だけに存在する地図がおよそ3,800点あることが判明した。特に、旧領土（朝鮮半島、台湾）や旧満州、インドネシア・スマトラ島の地形図、ならびに航空図や航空気象図、海図に該当する地図が多くみられる。その中には、『朝鮮半島五万分の一地図集成』（学生社、1981）に未収録の地図も存在し、各種の複製地図集に収録されていない地図の存在を調査する必要がある。

さらに、お茶の水女子大学の外邦図コレクションの特徴として、多数の兵要地誌図類の存在が指摘される。兵要地誌図は、既製の地形図等の上に、軍事行動にかかわる様々な地誌的情報を記載した地図である。お茶の水女子大学には、1943年（昭和18年）以降作製の南方地域の地図を中心に、73点が存在する。特に、ニューギニアとインドネシアを対象とした1943年作製の地図、フィリピンと南洋群島を対象とした1944年作製の地図が多く、当時の戦線の推移と参謀本部における対応との関連が示唆される（資源科学研究所より購入した地図は、もともと終戦時に東京・市ヶ谷の参謀本部より持ち出されたものである）。

また、戦場の部隊が実際の作戦用に作製した要図と思しき地図も存在する。例えばコレクションの中には、東部ニューギニアにおいて、ラバウル駐留の剛部隊（第8方面軍）写真印刷班が作製した地図が存在する。備考には、参謀本部の兵要地誌資料に加えて、現地部隊による空中偵察や実調査、宣教師と土民（原文ママ）の諜報により作製されたと明記されている。波集団（第23軍）司令部が1943年8月に作製した「広東省水路網図」も存在し、50万分の1の地図を14枚つなぎ合わせたものである。作製時期は大陸打通作戦の立案時期に一致するが、渡河にかかわる情報や河口部の状況が詳細に書き込まれている。

最後に外邦図の所蔵機関としての課題を述べておく。まず1点目に、コレクションの特徴および位置づけをより明確にすることが必要である。国内の大学が所蔵する外邦図は主に終戦直後参謀本部より持ち出されたものであることから、他のルートにより残されたコレクションとの比較が重要となる。2点目の課題は、外邦図の保管・管理・公開に関する問題への対応である。ただし、金銭的・人力的な制約が近年ますます強まっている。現実的な対応としては、今回の目録完成により明らかになったお茶の水女子大学だけが所蔵する約3,800点の地図を対象に、重点的な保管対策を講じたり、東北大学が公開して

いる外邦図デジタルアーカイブにデジタル化した地図画像を収録することが考えられる。特にデジタルアーカイブへの収録は、大学間における権利関係の調整も必要だが、外邦図の保護と公開・利用促進を両立させるための有効な手段として期待される。その予備作業のために、お茶の水女子大学地理学教室では大判のスキヤナを今年度購入し、準備を始めている。

文献

- お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 (2007) : お茶の水女子大学所蔵外邦図目録. お茶の水女子大学文教育学部地理学教室.
- 学生社 (1981) : 朝鮮半島五万分の一地図集成. 学生社.
- 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室 (2005) : 京都大学総合博物館収蔵外邦図目録. 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室.
- 東北大学大学院理学研究科地理学教室 (2003) : 東北大学所蔵外邦図目録. 東北大学大学院理学研究科地理学教室

白頭山一帯の近世韓国地図仮製版本の地形図に関して

南 榮佑（高麗大）・李 虎相（筑波大・院）

1. はじめに

最近、お茶の水女子大学にある外邦図の目録から白頭山一帯の5万分の1の地形図が10枚発見された。この10枚の地形図は、北朝鮮と中国の国境地域である豆満江という川の南側地域の地図である。これらは朝鮮総督府の臨時土地調査局が製作した地形図の一部であり、一般地形図の性格を持っているものである。

この10枚の地形図は、すでに韓国でもその存在を知られており、民需用の地図を軍需用として提供するために、既存の地形測量によって製作した原図を

仮製本したものである。ゆえにこの地形図は、日本軍の間諜隊が隠密で迅速に測量した迅速目測図である略図よりも後に製作された地形図であると考えられ、三角測量によって作られたものである。また本地形図の測量年度は大正5年と注記されているが、これは軍用秘図である略図が最後に印刷された時期にあたることから、朝鮮略図とは関係がないと思われる。



図1 「農事洞」5万分1地形図白頭山4号（仮製版）
（大正5年測図・大正9年製版、お茶の水女子大学地理学教室蔵）

2. 測量および製版年度

この10枚の地図の測量年度は、すべて大正5年と6年である。これは韓日合併（明治43年）が行われた後で、すでに朝鮮総督府が設置されており、したがってこれらの地図の著作権も参謀本部の陸地測量部ではなく、朝鮮総督部にこの地図の著作権があった。さらに、この時期は朝鮮総督部によって韓半島（朝鮮半島）の土地調査事業も行われた。これは参謀本部の陸地測量部が朝鮮略図を隠密で測量した状況と朝鮮総督部が地形図を作った状況とは全く違ったことを意味する。

これらの製版時期は大正8年(1919年)と大正9年(1920年)が大部分であり、「四芝洞 サジドン」と「上倉坪 サンチャンピョン」の地形図は、製版年度が不明である。そのうち、四芝洞の地図の場合は昭和13年(1938年)に修正された測量を適用し、上倉坪は大正9年に製版されたものと推定される。

これらの10枚の地形図のうち、四芝洞の地図を除いた9枚の地形図は、すべて昭和8年(1933年)に発行されている。また昭和15年(1940年)に発行された四芝洞は正式製版であるが、残り9枚はすべて仮製版本として発行された。

3. 地形図の性格

本地形図の性格は、地図の右側上端に押されている青色の「保存」と赤色の「秘」という印章から推測することができる。すなわち、陸地測量部(1921)の『陸地測量沿革誌』によると、日本政府は1910年に地形図を保存用と公開用で区分して臨時に公開した事があり、「秘」はその時に捺印したものと推定される。

それは「農事洞 ノンサドン」の地形図を推定の根拠とする。農事洞の地図の場合、測量年度は等しいが、発行時期は今回発見された昭和8年のもののほかに大正15年に発行されたものも存在する。このうち、大正15年の地形図には「秘」が押されており、昭和8年のものは「秘」と「保存用」がともに押されている。このような事実から「保存用」の印章が押されたのは、両年度の間と考えられる。

そして、この10枚の地図が秘密になることは、この地域の軍事的意味と関係があると思われる。この

地域は、朝鮮独立軍と日本軍間の軍事的衝突が多かった地域である。したがって、最初民需用として地図を製作したが、軍事的に重要な地域の地形図は、「秘」が押されたと推定される。

「保存用」の捺印を行ったことは、当時の東京・新宿区にあった資源科学研究所の地理学研究室、あるいは赤坂区にあった資源科学研究所の地理学部という二つの機関のうちのいずれかであると考えられる。そして、大正15年に発行された農事洞の地形図は、お茶の水女子大学の前身、東京女子高等師範学校の地理学室で保管されていたものである。一方、朝鮮略図の場合は、地形図の右側上端に「軍事機密」または「略図」と捺印されたものおよび何も表示されていないものの三つの種類がある。

また本地形図は、地図の定価が印刷されていることから、販売用であったと推定される。一方、軍用秘図である略図の場合、販売用ではないために定価が策定されていないだけでなく、地形図の下端に縮尺がメートル・朝鮮里・日本里の三つの種類が併記されている。

5万分の1の縮尺の韓国地形図は、明治期・大正期・昭和期の3次にわたって発行されたが、今回発見された10枚の地形図は、そのうち第3次の地形図だといえる。これまでに明らかにされているように、第1次の地形図である朝鮮略図は、明治27年(1894年)から明治39年(1906年)の間に測量され、第2次の地形図は大正3年(1914年)に測量を開始し、大正7年(1918年)に発行が完了された。なお、第3次の地形図は昭和の初期に何回かにわたって修正作業が行われており、図葉別の発行年度を把握することはできなかった。

軍用秘図である朝鮮略図は、日本軍の間諜隊が隠密で迅速に測量したものであるため、正確さでは劣っているが、第3次の地形図は朝鮮総督部によって何回も修正作業が行われたものなので、その正確さは高いといえる。しかし、1980年代まで、韓国では、日本帝国が1917年を前後として製作した5万の1の地形図を韓国の最初の近代的な地図とされてきた。この地図が実は第3次の地形図であり、すでに韓国でもその地図については知られてきた（南榮佑，1996）。

4. むすび

お茶の水女子大学の外邦図の目録から発見された10枚の白頭山一帯の地形図は、迅速目測図である略図が製作された以後の地図であり、朝鮮略図とは関係がないと考えられる。これは地図の測度年度、地図の右側上端に押されている「保存」と「秘」という印章、地図の定価が印刷されていることなどの事実から判断することができる。

つまり、今回のお茶の水女子大学の外邦図の目録

から発見された10枚の地形図は、韓日合併以後に刊行された第3次の地形図の計722枚中の一部だといえる。

文献

景仁文化社編(1990)近世韓国五萬分之一地形圖. 景仁文化社.

南榮佑(1996)舊韓末 韓半島 地形図. 外邦図研究ニューズレター、4、89-108.

南榮佑(1997)舊韓末韓半島地形圖. 成地文化社.

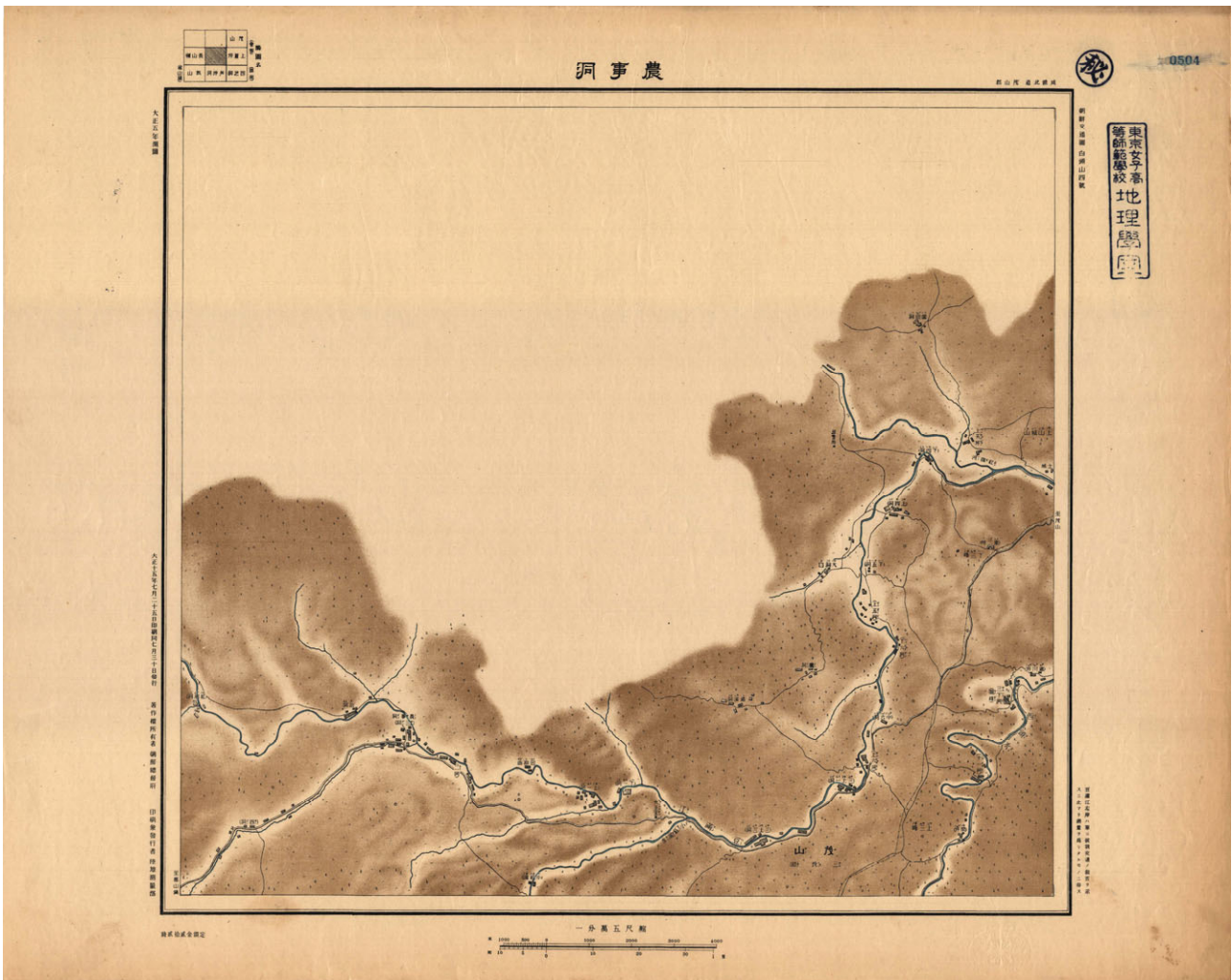


図2 「農事洞」朝鮮交通図白頭山4号
(5万分1、大正5年測図・大正15年印刷・発行、お茶の水女子大学地理学教室蔵)

お茶の水女子大学所蔵の台湾五万分の一旧地形図について

郭 俊麟（台湾中央研究院人文社会科学センター）

1. はじめに

お茶の水女子大学所蔵外邦図目録が刊行され、その中に台湾五万分の一地形図合計 108 枚が判明した。このコレクションは、要塞近傍図を全て収録しており、中央山脈の一部を除くほぼ台湾全島をカバーする貴重な地形図セットである。本稿では、まず、日本統治時代の台湾地形図の測量史における各時期の五万分の一地形図の性格を説明する。次に、お茶の水女子大所蔵の昭和期発行の台湾五万分の一地形図の意義とその位置付けをしたうえで、学生社復刻出版の『台湾五万分の一地図集成』の利用に関する注意点について述べる。最後に、お茶の水女子大目録に未収録の地形図に関して、台湾中央研究院の調査結果とその地形図の入手経緯を紹介する。

2. 殖民地時代の台湾の五万分の一地形図

殖民地時代における台湾地形図の性格は、日本の国勢の拡張や戦争の事態変化とともに、「殖民地征服」、「土地調査」、「内地延長」、「太平洋戦争」の四つの時期に分けられる。

「殖民地征服」時期に作製された台湾五万分の一地形図（迅速図）は、近代台湾における最初の五万分の一地形図であり、19 世紀後半清末の地表景観を記録した史料である。明治から大正にかけての「土地調査」時期には、台湾の中央山脈の山岳地帯と東海岸を対象にした「五万分の一蕃地地形図」が、台湾総督府警察本署・番務本署により作製された。この地形図セットは、当時の原住民集落を初めて地図化したのが、一部調査困難の山岳地帯には空白にしたものもあった。台湾が内地とされた「内地延長」時期には、日本全国の基本地形図の一環として台湾全島における「五万分の一地形図」が出版された。これは、殖民地時代において最も普及した地形図といわれる。1941（昭和 16）年以降の台湾は、太平洋戦争に巻き込まれ、軍事目的で、「台湾五万分の一編纂地形図」が終戦直前の 1944（昭和 19）年に製版されていた。一方、アメリカ陸軍製図局も同時に五色印

刷の台湾地形図を作製した。お茶の水女子大学所蔵の台湾五万分の一地形図は「内地延長」時期に発行された地形図であり、昭和期の日本国内で発行する内邦図と同じ性格を持っている。

3. お茶の水女子大所蔵の台湾五万分の一地形図の意義と位置付け

昭和年間に続々発行された台湾二万五千分の一地形図と台湾五万分の一地形図は、参謀本部・陸地測量部により、日本本土と同じ調査・測量手法で作製された近代的な地形図である。これらは、殖民後半期における台湾の近代化に関する地表景観を反映した貴重な史料であり、台湾地形図発展史においても欠かせないものである。台湾二万五千分の一地形図は、台湾の三分の一の面積を占める西海岸を中心に整備されたが、中央山脈の山岳地帯と東台湾は収録されていない。一方、五万分の一地形図は、ほぼ台湾全島について地上写真測量を併用した画期的な地形図セットと考えられる。

昭和以降に発行された台湾五万分の一地形図は、大正期の蕃地地形図と同じ縮尺で作製されたものだが、より精密な測量で殖民後半期の地表景観を記録した。特に、日本の政治力が浸透した台湾東部と中央山脈では、少数民族の集落や開墾のため日本からの移住者による移民村も読み取れる。

1982 年学生社の復刻出版による『台湾五万分の一地図集成』は、研究者の大きな関心を集めている。これは、1902（明治 35）年から 1939（昭和 14）年にわたって発行された、主に蕃地地形図と昭和期五万分の一地形図を組み合わせた地図集である。旧地形図収集の意義は大きいですが、上記のとおり本来異なる地形図セットを用いたものであり、その違いを踏まえた慎重な利用が求められる。

4. お茶の水女子大未収録の地形図に関して

お茶の水女子大所蔵の 108 枚の台湾五万分の一地形図は、ほぼ台湾全島を被っているが、澎湖列島と

一部山岳地帯の図幅は未収録である。筆者は 2002 年台湾中央研究院の委託で日本の防衛研究所史料閲覧室の台湾旧地形図を調査したが、防衛研究所の台湾五万分の一地形図の目録は、お茶の水女子大の所蔵とほぼ一致し、同じ未収録の図幅があった。これら未収録地形図は、台湾国内の大学や研究機関においても見つからず、「内地延長時期」に正式製版されていなかったか、あるいは 1937 (昭和 12) 年日中戦争開戦による測量作業の遅れによると推測できる。

一方、台湾中央研究院の調査によると、1944 (昭和 19) 年発行の「台湾五万分の一編纂地形図」は、上記の未収録図幅を含む台湾全域について、アメリカ国会図書館地図部に保管されている。この地形図セットは、太平洋戦争の準備のために編纂されたものであるが、継続していた台湾の五万分の一地形図の測量事業の一部と考えられる。たとえば、「出雲山」は、お茶の水女子大目録にない中央山岳地帯の図幅であり、昭和 19 年 (1944) 製版の五万分の一地形図である。この地形図は、未完成のように見えるが、地上写真測量を用いて蕃地地形図を修正したもので

ある。また、地図の下端に「Library of Congress Jul 28 1949」の印が認められる。日本敗戦後に連合軍またはアメリカ軍の接收を経て、アメリカ国会図書館に所蔵されるに至ったと考えられる。

5. 終わりに

本稿は、殖民地時代の台湾五万分の一地形図セットに関する比較をふまえて、お茶の水女子大目録にある昭和期台湾五万分の一地形図を中心に検討した。終戦直前に発行した台湾五万分の一編纂地形図と同年アメリカが作製した五万分の一地形図に関する議論は、今後の課題として残っている。お茶の水女子大外邦図目録完成によって、デジタルアーカイブの公開、『台湾五万分の一地図集成』の修正や本格的な出版が期待される。

謝辞 本稿の作成にあたり、台湾中央研究院計算機センターの廖法銘先生、歴史語言研究所研究員 (人文社会科学センター・GIS センター長) の范毅軍先生からご助言をいただきました。心より感謝します。

航空気象図について

田宮兵衛（お茶の水女子大）

1. はじめに

お茶の水女子大学の所謂「外邦図」コレクションに含まれていた「航空気象図」の概要を説明するとともに、本図に基づくなお必要な調査について整理する。

航空気象図は中央气象台によって作成され、B2サイズの用紙に25°S~60°N、70°E~150°Wの範囲が印刷されている。月別の、①地上風、②~⑧500m~6,000m上層風、⑨視界、⑩天気、⑪雷雨・雪の11種の図幅から構成されている。ただし、本コレクションでは、4月、8月、9月、12月の全種、1月の「雷雨・雪」図が欠落している。

全図幅がそろえば131枚あったと推定され、1月は昭和18(1943)年8月、以下順次毎月製版されているので、12月が製版されたのは、昭和19(1944)年7月と推定される。

2. 掲載内容の概略

①「地上風」には、気圧(2 mm Hg 毎)・風(主要地点風配図)・顕著低気圧経路、②~⑧「上層風」には、500m・1,000m・2,000m・3,000m・4,000m・5,000m・6,000m各高度面における等圧線(2 mm Hg 毎)・流線・推算気温の等値線(2.5°C間隔)が示されている。⑨「視界」には、霧日数・黄沙(風塵)日数・視程4 軒以下の日数・文献による特定地点の霧の特性等、⑩「天気」には、降水日数・雲量・文献による特定地点の天気の特性等、⑪「雷雨・雪」には、雷雨日数・降雪日数・地上等温線が示されている。

ここで、航空気象図の主要情報となるべき各高度面の気圧は、気温減率に0.5°/100mを仮定し海面気圧及び気温よりラプラスの公式(測高公式)により算出している。したがって、高層観測値のない空域においては、情報量は全高度同一になる。

3. 裏面について

裏面は、左右2段組で、解説、主要50地点の略気候表、主要20地点の上層風配図(地上~6,000米)及び大東亜の気候、主要航空路の気象概況(飛行例付)、航空気象に関する解説(着氷、雲、雪、天気、高層気象観測機械、飛行機雲、上層天気図、空中電気、

高層気象線図、地球磁気)等が掲載されている。

4. 航空気象図に関し今後調査すべきこと

①気象学史的価値:終戦直前羽田及び横浜(磯子)航空気象測候所長であった山田(2006)によれば、現場で本図を見た記憶は無いとのことであった。また、前記「大東亜の気候」の執筆は、福井英一郎・関口武という戦後日本地理学界の気候学者が担当し、各種解説の執筆者は地球物理学界の気象学者である。両者の住み分けは如何になされたのであろうか。

②軍事史的価値:昭和18年8月登戸研究所に「ふ号」作戦命令が出され、気象部門の中心は荒川秀俊技師(朝倉2007、吉野2000)であった。吉野(2000)によれば、風船爆弾飛行高度の太平洋中緯度高層気流図は、昭和19年2月に完成とあるが、本図との関係は今のところ不明である。

③月平均気温減率を0.5°/100mに仮定することの妥当性の確認に必要な気候学的調査は、少なくとも近年は行われていない。この調査は地球温暖化問題との関係でも必要と考えられる。

文献等

朝倉正(2007):personal communication.

山田直勝(2006):personal communication

吉野興一(2000):風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録. 朝日新聞社.

コメント 航空気象図について

谷治正孝(帝京大)

コメントを求められたので、気象庁図書館で確認したところ、同館にも本図は保管されていた。ただし、同館では8月、9月、12月が欠けていた。また、本図の前身に相当する日本本土付近を対象とした航空気象図も存在する。

Meteorological Monograph. vol. 1. No. 1. 掲載のJacobsによる“WARTIME DEVELOPMENT in Applied Climatology”に風船爆弾へのアメリカ気象学界の対応が報告されている。アメリカが入手していた高層データの量は、流跡線解析が可能なレベルに達していた。

外邦図デジタルアーカイブの公開と課題

村山良之（東北大）・照内弘通（東北大情報部）・
山本健太（東北大・院）・宮澤 仁（お茶の水女子大）

発表者らは、2004年度までに、外邦図目録の修正作業、外邦図のスキャニング実験に基づく画像データ精度等の検討（宮澤他，2004）および業者による試験的画像取得（250枚）によって、デジタルアーカイブの実現可能性を確信し、2005年度、外邦図研究会デジタルアーカイブ作成委員会による本格的アーカイブ作成作業を開始した。

画像データは、360dpi、フルカラー、フラットベッドスキャナによって取得し、無圧縮 TIFF 画像を保存用として蓄積した。それをもとに JPEG 画像を以下の3種類作成した。すなわち、①ピクセル数を落とさずにデータ量を軽くした画像閲覧用、②縦または横の長い方を2,000ピクセルに縮小したネット公開用、③同じく480ピクセルにして書誌情報とともに示すサムネイル用、である（村山他，2005）。画像データの保管については、上記4種類全てを4セットすなわち4台のHDDに蓄積し、これを東北大（2箇所）の他、お茶の水女子大、京都大にも保管していただき、リスク分散を図っている。

上記のうち、後二者の画像データと目録の書誌情報を組み合わせ、これに検索システムを独自に構築して、2005年12月インターネット公開を開始した。そして、2005年度に取得した5,189枚の画像も加えて、本格的公開を開始した。

本アーカイブでは、インデスマップ検索、キーワード検索、地域別データリスト検索という複数の検索の入り口を用意し、ここから書誌情報と地図画像サムネイルを同時に表示する画面、さらに地図画像に至る。このうち、中心となるのがインデスマップ検索である。インデスマップは、当初岐阜県図書館から許可を得てこれを用いていたが、目録の経緯度データ（一部岐阜県図書館のもの）を利用して新たにインデスマップを作成した。WEBGISによる検索システム構築がいまや一般的とも考えられるが、システムが重くなること（または専用の高性能サーバが必要になること）、ユーザのPCやブラウザ依存を完全には避けられないことから、あえてクリックルなインデスマップ画像を用いることとした。この静的インデスマップと、LAMP（Linux、Apache、MySQL、PHP）による動的情報検索手法の組合せが、本検索システムの特徴である。結果として、ネット上からもひじょうに軽い検索が可能になった。

最後に、本アーカイブに残された課題を整理しておきたい。①未入力画像がまだ膨大にあり、東北大だけで約4,000枚、この他に現段階で確認できるだけで京大とお茶大で約7,300枚ある。②本アーカイブでは、中国本土、朝鮮半島、ビルマの地図画像を非公開として設定してある。中国本土の外邦図がもともと多いこともあり、現在取得済みの約5,400枚のうち、東南アジア等の約1,500枚のみの公開となっている。これについては検討を継続していきたい。③目録のとくに経緯度データ整備が必要である。上記のとおりインデスマップ作成のためにはこれが必須であり、未入力（非掲載）図幅についての作業が求められる。④上記の検索システムとしたため、とくにインデスマップに関わる更新作業が煩雑になることが避けられない。全体の検索システムを含めて、維持、更新作業が簡便になるよう工夫しているところである。⑤本アーカイブでは、他機関の協力を得てその所蔵状況を示している。岐阜県図書館



外邦図デジタルアーカイブ トップページ
(<http://dbs.library.tohoku.ac.jp/gaihozu/>)

とお茶の水女子大の情報はほぼ完全で、国会図書館とも協議中である。ユーザの便と外邦図の全容把握のため、マッチング作業にもとづくこの情報の整備も継続しなければならない。

文献

- 宮澤仁・村山良之・上田元 (2004) : 「外邦図」のデジタル画像化とアーカイブ構築に向けてー東北大学における試行作業からー. 季刊地理学、56、163-168.
- 村山良之・宮澤仁・渡辺信孝 (2005) : 外邦図目録の作成からデジタルアーカイブ構築まで. 地図情報、25(3)、12-15.

コメント 外邦図デジタルアーカイブの公開と課題

鈴木純子 (元国立国会図書館)

外邦図の所在確認、目録作成を出発点とした外邦図研究会の活動の到達点として貴重な成果と考える。索引図による地図の検索から書誌データ、地図画像へという目的達成への流れが非常に軽快で、利用しやすい。

地図の検索、特に地形図のようなシリーズの切図中から必要とする地図を見出すためには、索引図によって収録範囲を確認できることの意義が決定的に大きい。筆者の僅かな体験から推して、システム開発の費用負担が気にかかったが、自己開発のシステムだということであり、担当者の力量と努力に負うものであることが明らかにされた。維持・発展のた

めの後進、関係機関への技術移転は可能であろうか。広く検討される必要がある。

検索画面については、地域概念図、詳細な索引図、目録情報が1画面上で見られることは、やや込み入った印象ながら使いやすい。ただ、欲をいえば詳細な索引図には地域の特定を可能にするための背景情報(水系など)がもう少し加わるとありがたい。同一地域が縮尺の異なる別シリーズでカバーされるようなケースはどのように処理されているのだろうか(この部分は当日質問できなかった)。

複数のサーバの分散配置などデータの保存についての配慮も十分と見受けられる。しかし、目前の運用だけに特定される一般のシステムと異なり、蓄積された資料の利用という永続を目指すデジタルアーカイブのシステムであるだけに、索引図への追加情報の書き込み、将来的なハード、ソフトの進化に対応するデータの更新、維持の体制確保が大きな課題である。追加情報という点では、このシステムに組み込まれている、他の外邦図所蔵諸機関の情報も総合的に表示できる枠組みは心強く、将来が楽しみである。

こうしたシステムが実現できたのも、目録情報の整備というこれまでの地道な作業の蓄積があつてこそのものである。研究会にとっても、ここまで築いてきた外邦図の保存・利用環境の維持・発展の継承は課題である。

なお、当日コメントでは追加情報として、国立国会図書館地図室の小林雪美、高野佳代両氏から、国立国会図書館OPACに最近収載された、同館所蔵外邦図の書誌データについての紹介も行われた。